

汲古一

「壬戌歳首」(一)

中村素堂

明けましてお目出とうございます。お陰さまで「書範」もかぞえ年二歳(注・昭和57年時)となりました。また一生懸命に書道を勉強してまいりましょう。

むかしは一月早々寒に入りますと書道も寒稽古というものをいたしました。今はそーっとやっているのかどうか知りませんが、どうもやらなくなったようです。お勤めの方々は正月も二月もなく平均して忙しくなったこと、学生たちは三学期は短いに期末試験、入学試験が迫ってくる。何か寒などという季節的な暇がなくなつた感じですが、一方武術それも日本のもの方では、水泳・柔道・剣道・相撲などはまだかなりやっているようでもあります。

書道はむかしからあまり派手な寒中の特習はやりませんでした。私は学校の教員であわせて小役人でもありましてやや忙しい方でしたが、禪の方で「冬安居」といったものをやるので朝早く起きて夜明け前にすませることを長い間やりました。

まあ、このついでに書もと考え、平生勉強の手が回りかねてゐるもの、たとえば崩し字などを暗記するために比較的むずかしい字の多い文章や詩を全部草書で書いたり、隷書だけの臨書を三年ばかり続けてみましたが、草書の暗記の方は大変役に立ったように思います。

この字は草書にその先例がないなんてことを発見したり、草書が楷書や行書を崩したのではなく、おおむね隷書から崩され、中には篆書からじかに草書になったものもあることを知り、驚いてその方の文献を調べるとチャンとそう書いてあって、学問をする順序の違いを苦笑した次第でした。こういう逆の順序のために学問ではなく実技の上で先にこれを記憶したため、いざ書くという時の出典ははつきりして、今でも大変重宝しています。

別に寒稽古というほどのお勧めもありませんが、書道にかぎらず読

書でも何でも季節に耐える勉強は、たしかに何か得るところがあるようです。

日下部鳴鶴という明治の四大家のひとつとして尊敬されている大先生が臨書した「書譜」とか「蘭亭序」などを見ますと、よく百臨の三十五とか百臨の八とかとしてあるのは、寒稽古ではないかもしませんが、古人のみずから修めるキマリとして、ひとつの帖を百回も臨書すると決めている態度はまことに感動させられます。

私も人まねをして「論語」という本を百回読んでみようと思つても判明しない字があればいく日でも調べてみるようにして「突西歳晩」に百回読み終わつたとき、その小型の本の裏に書き込んでおりました。突西というのは昭和八年で、その十二月に百回を十五年かかって完了です。これは毎日埼玉県の浦和から東京に通う汽車(そのころは、東北線、高崎線に電車はありませんでした)の中で、浦和―上野間四十分、絶対これを読んでいたのです。さすがに百回読み終えた時は一種の感慨を催しまして、論語の句の四、五字くらいものを百枚書いて親しい人々に呈上したりした。気が落ち着いてくると、むかしの人はみんなこのくらいの勉強はしたらしいので、若い時の氣負つてゐる姿が少々恥ずかしいのですが、これが私の禪に惹かれるようになる動機というか縁になつたので有り難かつたことは事実です。

ところで、今年(昭和57年)は十干十二支で「壬戌」という年です。年末あたりから出回って方々に吊してあるカレンダーに犬の絵があるので、ああ犬の年だなあとご存じのことでしょうが、壬戌は「みづのえいぬ」と訓み、音は「じんじゅつ」です。「戌」の字は「戌」と間違えやすいですが、「戌」は中が一の字で点ではありません。

実は書道の方の人々は、昭和五十七年というのを余白の関係や何かで壬戌と略して書きますから、今年一ぱいお使いになる時は、戌はまもり、戌はいぬとを記憶くださるよう。

この壬戌にいやに力を入れて説明がましいことを申し上げておりますが、ついでに少々お話ししたいことがあるのです。(つづく)

【筆間雑記】中村素堂隨筆集(昭和六十三年刊より転載)。(書範)昭和五十七年一月